Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch

Malaria

マラリア勉強会運営報告書

2021年3月-4月

目次

勉強会概要 **3**
はじめに 3
到達目標 3
講演者一覧 3
日程一覧 4

勉強会報告 **5**
「研究」グループサマリー 5
「臨床」グループサマリー 6
「行政」グループサマリー 7

謝辞 **8**

マラリア担当班 編

研究担当
玉井葉奈（愛媛大学医学部医学科6年）
上杉優佳（東京大学医学部医学科4年）

臨床担当
吉原七海（長崎大学医学部医学科5年）/勉強会運営責任者
青木雅実（大阪大学医学部医学科6年）
竹田早希（東京女子医科大学医学部医学科5年）

行政担当
佐藤樹（琉球大学医学部医学科6年）
久保田光毅（昭和大学医学部医学科5年）
奈倉里穂（千葉大学看護学部2年）
松岡明里（長崎大学医学部医学科2年）

本報告書における発表内容は，その責任と著作権を日本熱帯医学会学生部会が所有します．その内容のすべて，あるいは一部を，無断で複製・転載すること，インターネット等で掲載することは，理由の如何を問わず権利の侵害となります．あらかじめご了承ください．

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.

勉強会概要

はじめに

第4タームではマラリアについて学習した。マラリアは現在なお、世界で2億2900万人が感染者、40万9000人の死者（2019）を出している世界三大感染症の一つである。死者のうち多くは5歳以下の子供たちで、特にアフリカで大きな問題となっており、熱帯医学を学ぶ者にとっては切っても切れない疾患である。本タームでは、基礎研究・臨床・行政の三本柱でマラリアについて学びを深めた。

到達目標

1. 臨床・研究・行政の3つの分野からマラリア対策を考察して、感染症対策には多様なアプローチがあることを知ってもらう。ラボからフィールド、そしてグローバルな視点と、感染症対策を様々な空間的軸から考察する。

2. 長いあいだ我々人類を悩ませてきたこの疾患をその歴史と共に振り返り、過去から教訓を得て、未来の対策を考えるうえでの足掛かりとする。

講演者一覧

研究分野
金子修博士
長崎大学熱帯医学研究所原虫学分野教授
日本熱帯医学会理事長

臨床分野
金子明博士
大阪市立大学大学院医学研究科　寄生虫学分野教授/感染症科学研究センター長
カロリンスカ研究所教授

行政分野
狩野繋之博士
国立国際医療研究センター研究所　熱帯医学・マラリア研究部長
日本熱帯医学会前理事長

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.

日程一覧

Week1 3/10(水) 20:00-21:30 学生勉強会
Week2 3/17(水) 19:00-20:30 金子修博士講演会

Week3 3/25(木) 20:00-21:30 学生勉強会
Week4 4/1(木) 19:00-20:30　金子明博士講演会

Week5 4/18(日) 20:00-21:30 学生勉強会
Week6 4/25(日) 20:00-21:30 狩野繋之博士講演会

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.

勉強会報告

「研究」グループサマリー

「マラリア原虫の赤血球侵入機構」というテーマのもと、Week1で学生勉強会を行い、Week2にて金子修先生をお招きし、ご講演をしていただいた。
Malaria termでは、基礎研究・臨床・行政を三本柱として学習し、Week1とWeek2ではマラリアの「基礎研究」を取り扱った。マラリアにおける最新の研究について知り、マラリアの未知の部分を垣間見るとともに、講演会では研究者としてのキャリアや研究マインドを知り、将来研究医を目指す学生への後押しになることを目指した。

2021年3月10日（水）に行われたWeek1の学生勉強会では、マラリア原虫の種類や生活環、ハマダラカなど基礎的な項目に加え、Week2のご講演に向けた赤血球侵入機構や最新の研究（マラリアワクチン、クロロキン耐性マラリアに対するアルテミシニンの機序）について学んだ。

2021年3月17日（水）に行われたWeek2では、長崎大学熱帯医学研究所原虫学分野教授の金子修先生をお招きし、ご講演していただいた。金子修先生は、日本で30年近くマラリアの基礎研究に当たられ、ワクチンや薬剤開発の基礎となるマラリア原虫の分子生物学的研究に携わってきた方である。

ご講演では、赤血球侵入機構についての研究、ネズミマラリア原虫を用いた研究、アルテミニシン耐性マラリアの研究、など先生がこれまで取り組まれた研究・プロジェクトについての大変興味深いお話をして頂いた。また、先生が歩んで来られたキャリアや研究に対する思いについても丁寧にお聞かせくださった。学生一同、マラリア原虫の奥深さにさらに惹きつけられるとともに、先生自身がマラリアの研究に対して熱い想いを持っていらっしゃり、未知の部分に一つ一つ真摯に向き合っておられる姿勢が大変印象的であった。今回のご講演ではマラリアに対する知識を深めることに加え、将来熱帯医学の研究を志す学生にとっては特に刺激を受ける内容となったのではないかと思われる。

文責：玉井葉奈、上杉優佳

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.

「臨床」グループサマリー

Week3&4では、前回の基礎研究の勉強に並び、マラリアの臨床について勉強を行った。「マラリア流行地におけるフィールド研究～ケニア・ヴァヌアツ島嶼の事例より～」という題で、マラリアのフィールド研究から、現地でのリスクコミュニケーションまた撲滅への取り組みについて、金子明先生を招聘し、ご自身の経験をもとにご講演いただいた。

2021年3月25日（木）における学生勉強会では、マラリアの臨床症状・検査、予防・対策、抗マラリア薬についてスポットを当て、初感染の臨床経過や獲得免疫による無症候性原虫保有者の出現、途上国でも行われる検査方法、三日熱マラリアと熱帯熱マラリアの違いやWeek4でご講演頂く金子明先生が実際に使われた予防法と対策、抗マラリア薬の機序や予防薬について学ぶなど、先生のご講演に向けて準備を行った。

金子明博士は大阪市立大学大学院医学研究科寄生虫学分野教授で、現地に赴きその生活に即した形でマラリア対策をされてきた方である。ヴァヌアツではマラリア撲滅を成功させ、現在でもマラリア根絶のために様々なご活躍をされてらっしゃいる。

2021年4月1日（木）に行われた金子明博士のご講演では、前半はヴァヌアツでの対策と、三日熱マラリア・熱帯熱マラリアの違い、またそれ故に出てくる課題を知ることで、ヴァヌアツでのマラリア撲滅に関して、どのようなアプローチをし成功させたのか具体的に学ぶことができた。ご講演の後半では、地球規模でマラリア根絶への道程として、5歳以下の子供の死亡率や殺虫剤の効果減弱の出現、無症候性感染者など、現在直面しているあらゆる課題に対してどのように対処して今後の対策活動をされていくかの新たな知見を得た。SATREPSによる統合的モニタリングや現地住民のマラリアに対する行動変容を促すアプローチは現場で活動されている博士ならではの観点であり、大変貴重なものとなった。

私たちは、自ら学習し・金子先生と打合せを行い・ご講演頂く過程で、マラリアについて以前よりもはるかに深く知ることができ嬉しく思う。金子先生がおっしゃっていた統合的な対策という概念はマラリアのみならず他の疾病に対しても有効なものであり、頭に留めておくべきと感じた。流行地でのマラリア対策という、日本では得られない視点からのご講演は得難いものだった。

文責：青木雅実、竹田早希、吉原七海

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.

「行政」グループサマリー

4月18日（日）に行われたWeek5の学生勉強会では、疾病負荷という概念からマラリア対策の重要性を学び、また、Week6のご講演に向けて、世界のマラリア政策の歴史と現状、またそれに対する日本の貢献と取り組みについて勉強した。

Week6の演者である狩野繁之博士は現在国立国際医療研究センター熱帯医学・マラリア研究部長であり、マラリアはもちろんのこと、熱帯医学界の更なる躍進、ひいてはグローバルヘルス達成に多大な貢献をしていらっしゃる。これまでに、スーダン、フィリピン、ソロモン諸島、タイといった様々な地域でマラリア対策に携わってこられている。

2021年4月25日（日）の世界マラリアデーに行われたWeek6のご講演では、これまで世界で行われてきたマラリア政策の道標に沿って、狩野博士の関わりやご経験についてお話をいただいた。ご講演から、マラリア政策は開発による弊害、自然災害、戦争によって大きな影響を受けるとともに、貧困や農業など多くの分野に対して良い影響をもたらすことを学ぶことができた。また様々な国や地域でマラリア対策に従事されたご自身の経験から、それぞれの地域に合った取り組みを行うことの重要性をご教授いただいた。データを活用して活動を評価し、課題を発見し対策に反映させていくという、目標達成に対する姿勢や考え方からも非常に多くの学びを得ることができたと思われる。

博士は、マラリア対策において多岐にわたるご経験をお持ちであり、Malariaタームの目標の一つであった、マラリア対策における多角的なアプロ―チについての学びをまとめることができたと考えられる。また今回のご講演は、特に将来行政という立場から熱帯医学に携わりたいと考えている学生にとって、将来の自身の関わり方を考える貴重な機会にもなったのではないだろうか。

文責：佐藤樹、久保田光毅、奈倉里穂、松岡明里

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.

謝辞

マラリアは昔から世界の人々の健康を脅かしてきた疾患であり、現在なお私たち人類に大きな影響を与え続けていて、研究のテーマの尽きることのない分野だと感じる。また熱帯医学に関わる者にとってこれほどcommon diseaseな疾患があるだろうか。東南アジア、アフリカ、南米、どこにいってもその地で医学に携わる限りマラリアからは逃れられないだろう。それほど重要な疾患を扱うことができて嬉しく思うと同時に、大変話題に富んだ分野でもあるためまだまだ伝えきれていない部分もあるのではないか、勉強不足ゆえに会員の疑問にこたえきれなかったのではないかと不安にも思う。

今回ご講演頂いた先生方はマラリア分野はもちろんのこと、熱帯医学分野自体の発展にも貢献なさってきた方々で、おかげさまで様々な視点からマラリア対策を考察することができたと思う。印象的であったのは画一的なマラリア対策などは存在しないということだ。これは金子明先生だけでなく、狩野先生もおっしゃっていたことである。地域ごとに文化が異なるのだから、感染拡大の要因も異なりそれに応じて対策も変えていかなければならない。フィールドに出ることが大切だとは感じていたものの、なぜ大切なのかという理由まではよく実感していなかったように思う。それゆえに本タームのまえまでは「世界基準のマラリア対策を考える必要がある」、など考えていた。世界基準の共通なマラリア対策など存在しない。共通していえることは、「それぞれの地域ごとに対策を考えなければならない」という一点だ。感染症対策は帰納的でなく、個々の事象ごとに向き合う必要があるのだと感じさせられた。

グローバルヘルスが唱えられるこの時代に、世界規模の問題を解決したいと思えばむしろローカルな視点が求められるというのは非常におもしろいと思う。このような気付きを得たのも全て金子修先生、金子明先生、狩野繁之先生のご指導の賜である。心より御礼申し上げますと共に、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.

Copyright ©Japanese Society of Tropical Medicine Students' Branch. All Rights Reserved.